2016

日中大学フェア＆フォーラム in CHINA 2016 開催報告書

国立研究開発法人　科学技術振興機構
中国総合研究交流センター

CONTENTS

日中大学フェア＆フォーラム in CHINA 2016
開催趣旨・・1
開催概要・・1

1.日中大学フォーラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

2.JST 北京事務所設立 15 周年及び CRCC 設立 10 周年記念式典・・・・・・・・・・8

3.日中大学フェア及び日本留学説明会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

4.日本技術説明会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

5.曲阜師範大学でのセミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

6.アンケート集計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

日中大学フェア＆フォーラム in CHINA　2016

【開催趣旨】

世界の一流大学とは何か?

毎年、さまざまな機関から「大学ランキング」が発表されており、ここ数年、中国を筆頭にアジアの大学の上位進出が続いている。しかし欧米に比べると、まだその差は大きいといわざるを得ない。

21 世紀アジアは世界の成長センターといわれている。成長を支えるのはイノベーションであり、イノベーションを生み出す高度人材の育成が成長の鍵を握る。大学の役割はきわめて大きい。一流大学の条件は、学術論文、出願特許などの指標に加えて、高等教育の質と研究の独創性、国際性などが問われている。

今回の「日中大学フェア&フォーラム」では、日中双方のトップクラスの大学それぞれ約 10 校から学長クラスにご参加いただき、世界最高レベルの大学を構築するための方策について語っていただくと同時に、パネルディスカッションで、教育と研究の両立、グローバル化、世界への貢献など、日中双方の大学が抱えている課題について議論していただく。

【開催概要】

１.日中大学フォーラム

概要:日中両国の代表的な大学学長クラス及び研究機関関係者により、世界一流大学の構築、高等教育機関における人材育成（グローバル人材育成を含む）及び研究開発などについて、講演、討議する。

日時：平成 28 年 5 月 6 日（金）　9：30-18：00
会場：中国科学院学術会堂（中国北京市海淀区中関村北一条 15 号）
主催：国立研究開発法人科学技術振興機構、中国科学院大学
使用言語：日本語、中国語（日中同時通訳付き）
テーマ：「世界最高レベルの大学を目指して～高等教育と研究開発の両立をめぐって～」
総合司会 :伊藤　宗太郎　科学技術振興機構副理事／呉　岳良　中国科学院大学副学長

9：30-9：50 主催者挨拶
丁　仲礼　中国科学院副院長、中国科学院大学学長
濵口　道成　　科学技術振興機構理事長

9：50-10：10　来賓挨拶
劉　叢強　国家自然科学基金委員会副主任
戸谷　一夫　文部科学審議官
伊藤　康一　在中国日本国大使館首席公使

10：10-10：40 特別講演
野依　良治　科学技術振興機構研究開発戦略センター長

10：40-11：05 基調講演①
万　立駿　中国科学技術大学学長

11：05-11：30 基調講演②
里見　進　東北大学総長

11：30-11：40 さくらサイエンスプラン紹介
沖村　憲樹　科学技術振興機構特別顧問

11：40-11：50 中国留学制度紹介
張　寧　国家留学基金管理委員会副事務局長

11：50-13：30　　休憩

13：30-15：10　　パネルディスカッション①
テーマ　「大学における教育と研究の両立をめぐって」
モデレータ
呉　朝暉　　浙江大学学長
パネリスト
鵜飼　裕之　　名古屋工業大学学長
羽田　正　　東京大学理事・副学長
藤嶋　昭　　東京理科大学学長
室伏　きみ子　　お茶の水女子大学学長
段　献忠　　湖南大学学長
関　乃佳　　南開大学副学長
王　乗　　蘭州大学学長

呉　朝暉　　浙江大学学長
袁　駟　　清華大学校務委員会副主任

15：10-15：30　コーヒーブレーク

15：30-17：50　パネルディスカッション②
テーマ　「世界最高レベル大学の条件とグローバル人材の育成」
モデレータ
角南　篤　政策研究大学院大学副学長
パネリスト
久保　千春　　九州大学総長
西尾　章治郎　　大阪大学総長
橋本　周司　　早稲田大学副総長
松尾　清一　　名古屋大学総長
山極　壽一　　京都大学総長
山口　佳三　　北海道大学総長
蘆　中昌　　大連理工大学副学長
寧　濱　　北京交通大学学長
席　光　　西安交通大学副学長
周　玉　　ハルビン工業大学学長
朱　崇実　　厦門大学学長

17：50-18：00　閉会挨拶
呉　岳良　中国科学院大学副学長
安藤　慶明　科学技術振興機構理事

２．JST 北京事務所設立 15 周年、CRCC 設立 10 周年記念行事、及び交流会

概要：日中の大学および産業界との活発的な交流を図るため、中国の政府機関をはじめ、大学・研究所・産業界・メディアなどの関係者に幅広くご参集いただき、実りある交流の場とする。

■北京
日時：平成 28 年 5 月 6 日（金）　18：30-20：30
会場：北京遼寧大厦　（北京市海淀区北四環西路甲二号）
■済南
日時：　平成 28 年 5 月 9 日（月）18：30-20：30
会場：　山東大学学人大厦　（山東省済南市山大南路 27 号）

３．日中大学フェア

概要：
１）日本の大学の魅力を紹介するとともに、中国の大学との協力関係強化や中国人留学生の獲得を目指す。
２）日本の大学・研究機関・大学発ベンチャーなどが、最新の研究成果を展示し、来場する中国側の大学･企業関係者への宣伝を通じ、両国間の研究交流、技術交流、共同研究、産学連携、大学・企業間連携を推進する。
出展内容：各大学の概要、留学生募集要項、奨学金情報、中国に移転可能な技術、等

■北京
日時：平成 28 年 5 月 7-8 日（土・日）　10：00-17：00
会場：全国農業展覧館新館　（北京市朝陽区東三環北路 16 号）
日本側出展大学：（36 校・機関）
岩手大学、大阪大学、お茶の水女子大学、科学技術振興機構、香川大学、加計学園、関西学院大学、九州大学、京都大学、京都工芸繊維大学、工学院大学、神戸大学、芝浦工業大学、上智大学、中央大学、中部大学、電気通信大学、東京大学、東京理科大学、東北大学、名古屋大学、名古屋工業大学、日本学術振興会、日本学生支援機構、一橋大学、広島大学、法政大学、北海道大学、三重大学、宮崎大学、明治大学、横浜国立大学、理化学研究所、立教大学、立命館大学、早稲田大学
■済南
日時：平成 26 年 5 月 10 日（火）13：00-17：00
会場：済南万達凱悦酒店（済南市市中区経四路 187 号）
日本側出展大学：（14 校・機関）
お茶の水女子大学、科学技術振興機構、香川大学、加計学園、京都工芸繊維大学、工学院大学、神戸大学、中部大学、電機通信大学、一橋大学、福井大学、北海道大学、横浜国立大学、理化学研究所

４．　留学セミナー

概要：留学生受け入れ政策、各出展大学の紹介、留学生募集要項など

■北京
日時：平成 28 年 5 月 7 日（土）10：30-16：00
会場：全国農業展覧館新館日本展示エリア（北京市朝陽区東三環北路 16 号）
発表機関：日本学生支援機構、岩手大学、お茶の水女子大学、香川大学、関西学院大学、神戸大学、電気通信大学、一橋大学、北海道大学、横浜国立大学、理化学研究所、立教大学、立命館大学、早稲田大学（計 15 校、機関）
■済南
日時：平成 26 年 5 月 10 日（火）13：30-15：30
会場：済南万達凱悦酒店日本展示エリア（済南市市中区経四路 187 号）
発表機関:お茶の水女子大学、香川大学、神戸大学、電気通信大学、一橋大学、北海道大学、横浜国立大学、理化学研究所（計 8 校、機関）

５．　日本技術説明会

概要：日本の大学、高専、企業により、中国側企業関係者向けの日本新技術を発表する。

■北京
日時：平成 28 年 5 月 8 日（日）　10：00-14：40
会場：全国農業展覧館新館セミナー室（北京市朝陽区東三環北路 16 号）
発表機関：鶴岡高等専門学校、小山高等専門学校、福井高等専門学校、茨城高等専門学校、富山高等専門学校、高知大学、堀場製作所、富士電機(中国)有限公司、香川大学、電気通信大学（TLO キャンパスクリエイト）（計 10 校、機関）
■済南
日時：平成 28 年 5 月 10 日（火）　9：00-15：30
会場：山東大学知新楼 3F ホール　（山東省済南市山大南路 27 号）
発表機関：鶴岡高等専門学校、小山高等専門学校、福井高等専門学校、茨城高等専門学校、富山高等専門学校、高知大学、堀場製作所、富士電機(中国)有限公司、香川大学、電気通信大学（TLO キャンパスクリエイト）、福井大学　（計 11 校、機関）

1. 日中大学フォーラム

「世界最高レベルの大学を目指して　～高等教育と研究開発の両立をめぐって～」を総合テーマに掲げた日中大学フォーラムが、5 月 6 日、北京の中国科学院学術会堂で開かれ、日中の大学人がそれぞれの大学の活動状況を報告し、目指す将来の大学像について意見を発表した。

会場は演者を囲むように円形の席になっており、すべての席のディスプレイには演者の発表内容が映し出された

まず、主催者を代表して中国科学院、科学技術振興機構（ＪＳＴ）からそれぞれ挨拶がおこなわれた。最初にマイクに立った中国科学院副院長で中国科学院大学学長でもある丁仲礼博士は、開催のため日中の大学関係者が、多忙なスケジュールを調整して北京に集まったことに感謝した。

そして１９８０年代からの中国科学院の歴史と日本との交流を振り返りながら「このような歴史的な交流をもとに、私たちは将来に向けてさらに学術交流を発展させたい」と呼びかけるように話をした。

また中国科学院は、傘下の１００余りの研究所から大学院生を受け入れて博士取得などの教育を行っているが、これを学部学生の教育に拡大していることを報告した。また、中国科学院大学は、１１００人余りの外国からの留学生を受け入れており、国籍は約８０に及ぶことも紹介した。その中には日本から６人が留学しているという。

国家の発展と共に人材育成に取り組む中国科学院の積極的な活動の報告だった。

続いて挨拶に立った濵口道成・ＪＳＴ理事長は、近年の中国の科学技術研究や知的財産活動の急進的な発展を称え、ＪＳＴもこのような時代をとらえて北京事務所を開設し、中国総合研究交流センターを創設した。一昨年からはさくらサイエンスプラン事業を立ち上げて積極的に中国との科学交流を進めている現状を説明した。

２１世紀に入り、世界の研究現場だけでなく、社会の発展もかつてない速さで変革している状況を語り「研究成果も１０年かけたものが数か月で書きかえられてしまう時代を迎えた。大学もオープンでグローバルな関係を作らないとトップになれないし時代の要請にも応えられない。日中の大学交流によって質量共に連携を進展するように期待している」と語り、日中大学フェアの一層の進展に期待を込めた。

挨拶する濵口理事長

祝辞はいずれも日中科学技術交流の意義を強調

主催者挨拶のあと、日中から３人が祝辞を述べた。まず中国の劉叢強・国家自然科学基金委員会副主任は、基礎研究は大変重要であり日中の科学技術交流は、共同研究やシンポジウムなどで多くの成果を出してきたことを報告した。

さらにイノベーション創出のために人材の育成は重要であり、交流のサポートを充実させないとならないと強調。「日中両国は隣国であり、これまでもいろいろな合意があり交流してきた。これからも実務的な協力をして行くべきだ」と訴えた。

祝辞を述べる戸谷一夫・文部科学審議官

また戸谷一夫・文部科学省文部科学審議官は、最近実現した日中の女性科学者の交流や日本･アジア青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプラン」などの実績に言及しながら、日中の科学技術交流の進展を評価した。そして「日中両国にとって科学技術交流は、パートナー同士であり重要なものだ。日本の全留学生のうち４割以上が中国からであり、活発な交流の一端を示している」と語った。

第５期科学技術基本計画が策定され、これからは人材力、大学の国際共同研究、ＩＴ技術を最大限に活用する時代になり、「日中両国の科学技術交流は非常に重要であり、今後につながる緊密な交流になるように促進してほしい」と呼びかけた。

祝辞を述べる伊藤康一・在中華人民共和国
日本国大使館首席公使

最後に祝辞に立った伊藤康一・在中華人民共和国日本国大使館首席公使は、日中大学フェアは、この種の交流事業としては最大のものになったと位置付けた。日本の第５期科学技術基本計画と中国の第１３回科学技術５か年計画が互いにスタートした時点であり、中国ではイノベーションの必要性と人材育成などを掲げている。

「中国の李克強総理も語っているように、若い人材なくしてイノベーションは生まれない。このような事情は両国とも同じであり、今後も青少年交流が大事だ。さくらサイエンスプランは中国指導者からも高く評価されている」と語り、こうした交流は両国のイノベーション推進に貢献することを語った。

この後、日中の参加者らを囲んで記念撮影が行われ、開幕式を終了した。

参加者全員の記念撮影

感銘を与えた日中大学フェアの特別講演と基調講演

「これからの社会のための科学と技術」ノーベル賞受賞者の野依良治博士が特別講演

日中大学フォーラムの開会式が終了した後、日中の３人の代表による特別講演と基調講演が行われた。講演要旨は次の通り。

特別講演は、ノーベル化学賞受賞者の野依良治・科学技術振興機構（ＪＳＴ）研究開発戦略センター長が「これからの社会にための科学と技術」のタイトルで講演した。

まず、自身が４３歳のときの１９８２年に初めて訪中した際の思い出の話を語り、中国科学界の

偉大な研究者と交流してきたことを紹介した。続いて野依センター長のノーベル賞受賞業績となった有機化学の右手系と左手系の研究内容を説明し、左右対象系でありながら、そのどちらかの化学的な構造によって味や匂いが変わったり、実社会に有効なものになったり医薬品になる一方、半分が役立たないものになったり毒性を持つ化合物であることを分かりやすい構造式などで説明した。

野依良治博士・科学技術振興機構研究開発戦略センター長

２７歳のときに、左右を効率的に分けることができる原理を偶然発見したが、まだ実用性が低かった。しかし名古屋大学に移り左右の役立つ方を産業に生かす方法を企業と一緒に開発し、単なる技術開発ではなく社会的に意義のある研究だったことを説明した。

続いて「中国には偉大な科学の歴史がある。火薬、印刷技術、紙、羅針盤という中国の四大発明は、欧州に伝えて文化の発展に大きな影響を与えた」と語り、東洋医学でも独自の研究を発展させた。いまや世界の第２の科学大国だと語った。

世界の経済規模が急激に拡大してきた現状を報告し、無限の拡大は不可能であり、今後の経済は質の問題をするべきだと主張した。環境、エネルギー、人口問題など直面する課題を乗り越えるには文明論が必要であることを訴え、これからの時代を先導する科学技術の在り方を考えるべきだと語った。そして日中の科学技術協力によってこうした世界的な課題を解決するための世界の中核になってほしいと期待を述べた。

先端人材の育成で
リーディング的な大学を育てる
基調講演は万立駿・中国科学技術大学学長

万立駿・中国科学技術大学学長

万学長は、日本の東北大学に留学したことがあり、当時をふりかえりながら、日中の科学技術交流の先駆けとなった体験を話した。「いま第４次産学連携の時代であり、世界一流の大学を目指し、サイエンス・イノベーションをおこし、国家の戦略に沿った優れたイノベーションをおこす時代になった」と語った。

大学は優れた人材育成をしなければならないことを強調し、優れた人材とはイノベーションをおこす能力を持っているだけでなく、指導力も持っていることが重要であると主張した。同大学は１９５８年に設立されたもので、大学の経営方針の基盤は、大学と科学院傘下の１００以上ある研究所と融合を図っていく点であり、万学長はその歴史と組織の在り方を語った。

同大学は学部生が２万人以上おり、大学院生も１万人を超えている。教育方針は特に基礎教育を重点的にしており、イノベーション育成、ハイレベルの人材育成と共に、そのような教育ができる大学経営を行ってきたという。

研究センターの設立、放射装置をはじめとする先端研究装置の設置などにも恵まれ、研究テーマも、国家の重要な科学プログラム４３件を受け持っている。規模の大きな公共的、国際的な研究センターを立ち上げ、学部と融合して人材育成のプラットフォームを構築している現状を報告した。

アカデミーの院士は８人おり、２２の合同ラ

ボ・重点ラボが作られている。また、人材育成のモデルに取り組んでおり、少年クラスの育成では優秀な１６歳以下の少年・少女を大学生として受け入れる英才クラスを作っている。これらの年少学生も途中で自由に専門を変更する制度を取り入れ、修士課程、博士課程までに自由に専門を変更できるようにしているという。

これまでハイレベル人材の育成で貢献しており、研究成果でも地球物理学分野では中国で１位と評価されているのをはじめ２位とされているテーマも多数ある。国際大学ランキングでは１１３位になっており、多くの国際的な賞を獲得したと報告。「大学の使命はリーダーの育成にあるので、そのような大学作りに頑張っていきたい」と結んだ。

世界トップレベルの研究拠点を目指す
里見進・東北大学学長の基調講演

里見進・東北大学学長

里見学長はまず、東北大学の歴史を紹介し、特に魯迅が留学した１９０４年からの中国との交流を語った。この伝統は今も生きており、東北大学と中国の研究者交流は年々数を増加させているという。同時に東北大学と中国機関との共著論文も年を追って増加している。教育プログラムでは清華大学と連携しており、上海交通大学とはグローバル人材育成プログラムに取り組んでいる。

１９１３年に、日本で初めて女性を受け入れた大学だったように独創的な研究を生み出す研究第一主義の大学に育ち、ベンチャーを育成し実学を尊重する歴史を語った。

２０１１年に発生した東日本大震災からの復興への取り組みで、多くの先端的で先駆的分野の強化を促進し、防災を学際的に研究する試みでも大きな成果を出していることを報告した。

また医療情報とゲノム情報のコホート調査では、１４万人の調査を実施して２０１３年に１０００人のゲノムを分析した。これだけの規模は世界初だったと報告した。また伝統的に強い集積エレクトロニクスの研究では、研究開発センターを設置して若手研究者の育成とポスドクなどの研究者に重点を置き、広い視野を持った人材育成に取り組んでいると語った。これは国際産学連携にもつながっているという。

７つの国際共同プログラムを推進し、世界３０傑に入る大学を目指すとしている。活発な研究者交流を展開しており、現在１６００人ほど留学生がいるが半分以上が中国人だとしている。これからも積極的な大学経営を行い、世界に通じる大学の実現に取り組むと表明した。

日中の厳しい状況を乗り越えた
大学フェア＆フォーラムの実施
沖村憲樹・科学技術振興機構特別顧問の報告

沖村憲樹・科学技術振興機構特別顧問

日本と中国の科学技術交流を活発に行う時代を認識し、１５年前にＪＳＴの北京事務所を開設し、１０年前から中国総合研究交流センター（ＣＲＣＣ）を設立した。その後、政治的な問題から日中間が冷え込み、非常に厳しい時代となったが、日中関係者の協力で今日を迎えたことに感謝の言葉を述べた。

日中大学フェア＆フォーラムの開催では、中国

政府の協力を受けながらスタートすることができた。しかしその後発生した尖閣列島問題などで、日中の人々の９割がそれぞれ相手国と国民に対し嫌悪感を示した異常な状況となり、これを是正するために若い世代の交流を目指すために日本･アジア青少年サイエンス交流計画「さくらサイエンスプラン」を創設した。

当初は中国の若い世代だけを対象にしたが、当時の文部科学大臣の指導で東アジア全体を対象とすることになった。しかし実際には、日本への招へい者は中国が比較的に多い事業となった。今年の招へい者は５千人だが、今後は１万人を招へいする計画を推進したいと訴えた。

このさくらサイエンスプランでは、中国の優秀な高校生を日本に招き、ノーベル賞受賞者の特別講義をはじめ、世界トップクラスの研究施設、大学などを訪問して実際の研究現場を見学するコースを作っている。このような事業内容は、招へいした高校生たちからも高い評価を受けており、ほぼ１００パーセントの高校生たちが日本人は親切でやさしく、研究レベルが高いと語っている。

また、沖村氏自身のことになるが、この１月に中国の国際科学協力賞を授与され、外国人受賞者７人のうちの第２位の序列で授与された。その時の写真が中国中に流れた。習近平主席体制下で初の受賞であり、行政官としても初の受賞であった。

「これは私自身への授与ではなく、日本政府が日中の科学技術交流を推進してきた成果を中国政府が評価してくれたものと受け止めている―」沖村氏は、これまでの協力に感謝し今後の一層の協力を要請した。

2. JST 北京事務所設立 15 周年及び CRCC 設立 10 周年記念式典

科学技術振興機構（ＪＳＴ）の北京事務所設立１５周年と中国総合研究交流センター（ＣＲＣＣ）設立１０周年を記念する式典とパーティが、５月６日、北京市内の遼寧大厦で開かれた。中国中央省庁、地方行政、科学技術、教育関連機関、大学、産業界の関係者らと在中国の日本関連機関、企業の関係者、日中大学フェア＆フォーラムの日本側出展者など約３００人が参加し、記念式典に続くパーティで懇談した。

写真１　挨拶する濱口理事長

記念式典で開会の挨拶に立った濱口道成・科学技術振興機構理事長は、１５年前、当時の沖村憲樹理事長がこれからは中国と科学技術で連携・交流することの重要性を認識して北京に事務所を開設し、それから５年後には、中国総合研究交流センターを設立して、積極的に日中科学技術交流を推進した歴史を紹介し、中国政府をはじめ各関係機関からの協力に謝意を表明した。

これまでの交流に加え、２年前からは青少年・学生・院生・ポスドク・研究者らを対象とした「さくらサイエンスプラン」も創設し、日中間の科学技術交流はかつてないほどに進展していることを報告し、今後一層の交流促進をする決意を述べた。また中国側の引き続きの協力を要請した。

続いて中国側からは中国科学技術協会の代表、中国科学技術協会副主席の張勤氏、科学院副院長兼科学院大学学長の丁仲礼氏らが祝辞を述べた。いずれ

も、これまでのＪＳＴの積極的な日中の科学技術交流を評価し、今後の促進・協力を表明した。

日本側からは、木寺昌人在中国大使が祝辞を述べ、戸谷一夫文部科学審議官の乾杯でパーティが開かれた。

この中で木寺大使は、ＪＳＴが主体的になって日中の科学技術交流に果たしてきた実績を高く評価し、これからも一層この交流が進展することを期待していると語った。

また、中締めの挨拶で沖村憲樹ＪＳＴ特別顧問は、「日中政府と科学技術関係者、大学・研究機関など多数の方の協力があってここまで続けられた。これからも日中の科学技術の発展のために両国の協力体制をより強固にして推進したい」と述べ、パーティが開催された。

パーティでは研究者や政府関係者らが楽しく懇談し、会場にはＪＳＴ北京事務所及びＣＲＣＣのこれまでの歩みについての映像が放映された。

写真２　会場は若い研究者や学生も交えて懇談の輪が広がった

3. 日中大学フェア及び日本留学説明会

北京会場

5 月 7 日（土）、8 日（日）の両日、北京市内の全国農業展覧館新館で開催され、多くの中国の学生が参加して盛況だった。

日本の大学と研究機関がブースを設置して学生たちの来訪を歓迎した

出展した大学などはそれぞれブースを設置し、大学・機関の概要をパネルやパンフレットで紹介。留学生募集要項、受け入れ体制、奨学金制度などの各種情報、中国に移転可能な技術などについて来訪者に説明した。

訪問したのは、中国の大学生、高校生ら若い世代だけに会場は大学のキャンパス並みに活気にあふれ、欧米の大学のブースも並んでいるため国際色豊かな雰囲気だった。

大学のブースには多くの学生が訪問して留学の受け入れを聞いていた

日本留学説明会を開催

展示会場の中に特設の教室を設置し、日本への留学について説明をする場を作った。

留学説明会には多くの学生が詰めかけた

目当ての大学の説明を聞く学生たちが教室に来訪し、留学についての活発な質問を行っていた。質問内容は、①日本に留学したいがどの大学がいいか、②奨学金の申請方法が分からないので教えてほしい、③日本での生活費はどのくらいかかるのか、④日本語がよく出来なくても英語で授業をしている大学はあるのか、⑤中国国内で入試を受けることは可能かなど、いずれも切実で具体的な内容が多かった。

学生に付き添ってきた日本に留学経験のある父親は、「日本への留学は魅力があるが、言葉ができない。それなら英語も勉強できる英語を国語とする国かヨーロッパへ留学する方に流れてしまう。もう一つの不安は、中日間の政治関係が安定するかどうかだ。将来また、緊迫するようなことが出てくるのではないかという不安はある」と複雑な気持ちを語っていた。

済南会場

5 月 10 日（火）は、山東省済南市の済南万達凱悦酒店で大学フェアが開かれ、こちらにも多くの日本の大学・研究機関がブースを開いて現地の学生に呼びかけた。

日本の大学がブースを設置した一角
大学展には、欧米の大学も多数ブースを構えていた

出展内容は、北京のときと同じ内容であり、留学説明会も開設した。ここでも多くの大学生らが特設の会場を訪れ、説明のあと質疑応答で留学への道を探っていた。

留学説明会を熱心に聞く学生たち（済南会場で）

4. 日本技術説明会

日本の大学・高専・企業などで研究開発した技術を中国に移転するための日本技術説明会が、５月８日（北京市）、１０日（山東省済南市）で開催され、多くの具体的な話や研究交流が展開された。

北京では、主催者挨拶と同時に、席が埋まり始めすぐに満席となったところで、最初の説明者、立命館大学の加古川先生の発表（技術テーマ：フィールドアプリケーションに応用可能なロボット）を皮切りに、次々と日本の技術が紹介され、順調に進行していった。パワーポイント及び発表は日本語で行われ、先生の日本語の説明に続き追時通訳で中国後に翻訳される形で、配布した冊子のパワーポイント資料はすべて中国語である。午前の部は１２時までに６つの技術が紹介され、聴講者は終始熱心に耳を傾けていた。

本北京会場での開催は当初の予定にはなく、聴講者はCRCCの中国人スタッフが声がけを行った企業等の３０名であるはずが、講演毎に数名が入れ替わるが直ぐに満席となり全体を通じて空席が無い状態で推移した。開催間際にプログラムが構成されたために、日中大学フェアの配付資料への記載は無く、また会場のセミナー室前にも本来展示されるプログラム表ましてや内容の広告も無い状況にも係わらず、参加者がどのようにして情報を仕入れどうして集まったかについては知るすべはないが、あらためて中国人の旺盛な活力には圧倒される。

北京会場の様子

質疑応答並びに名刺交換の時間は特に設けてはなく、発表の合間を縫って名刺交換する場面が散見されたが、聴講者の多くが日本語および英語での応対が出来ず、中国語のみであったために十分な交流は必ずしも出来たとは言いがたく、適切に通訳を配置したり面談の機会を設定しなかった点は反省すべきところである。

昼食を挟んで更に５つの技術が紹介され、午後は若干の空席も見られたがほぼ全体を通して盛況のうちに終了した。

一方、山東省済南市でも 5 月 10 日に技術説明会を行った。会場は山東大学知新楼３Ｆホールで、多くの中国側関係者が集まり、北京と同じテーマの説明内容に熱心に聴き入った。

済南会場の様子

発表機関の高等専門学校５校、大学３校および企業３社の発表者、テーマは以下の通り。

１. 立命館大学（加古川篤教授）フィールドアプリケーションに応用可能なロボット
２. 鶴岡工業高等専門学校（神田和也教授）ICT 農業
３. 小山工業高等専門学校（上田誠教授）微生物による発酵食品の開発
４. 福井工業高等専門学校（亀山建太朗准教授）自立型除草ロボット
５. 茨城工業高等専門学校（岡本修准教授）栗皮むき機
６. 富山高等専門学校（小熊博教授）耐災害のための通信技術とソフトウェア
７. 高知大学（柳沢和道教授）過熱水蒸気を利用した酸化物の低温合成

８.株式会社堀場製作所（村田道生代表）環境計測における最新技術の紹介
９.富士電機(中国)有限公司（李波氏）PM2.5の実態解明に貢献するエアロゾル複合分析技術
１０.香川大学（田村啓敏教授）食品素材中の高付加価値成分の分離精製技術
１１.電気通信大学TLOキャンパスクリエイト（安田耕平代表）先端レーザ樹脂溶解技術他
１２.福井大学（福山厚子研究員）資材を使用したカドミウム吸着実験について

5.曲阜師範大学でセミナーを開催

孔子の生まれ故郷にある曲阜師範大学（威万学・学長）を５月９日訪問し、さくらサイエンスプランなどによる日中の科学技術学術交流をテーマにセミナーを開催し、多くの学生と研究者が参加した。

１９５５年に創立された曲阜師範大学は、現在２つのキャンパスを抱え、中国政府の重点大学にも指定されるなど教員養成大学としてトップクラスの大学である。科学技術振興機構（ＪＳＴ）特別顧問の沖村憲樹氏ら代表一行が訪問すると、５３歳の威学長がはつらつとした態度で出迎えてくれた。威学長は３７歳のときに山東師範大学の副学長に抜擢され、この任務を１４年間務めてからこの大学の学長に登用された。

曲阜師範大学を表敬訪問して威学長（右）と交歓した

現在、学部学生は３万２千人、大学院生４千人が在籍し、修士課程の専攻が１３３、博士課程は３３の専攻がある。すでに４８万人の卒業生を送り出し、次世代の人材養成のために中国全土で活躍しているという。

威学長は「大学のグローバル化を重視して取り組んでおり、これからも海外へ多くの学生、院生らを出したい。ＪＳＴのさくらサイエンスプランにも積極的に対応していく」と語り、日本の大学との交流も進めていると表明した。

セミナーには多くの曲阜師範大学の学生・研究者が参加

威学長への表敬訪問のあと、日中大学フェア＆フォームで訪中した日本の大学・高専関係者と同大学の学生、研究者らも参加するセミナーが開かれた。

ここでも威学長は、日中の科学技術交流の重要性を語り、「これからも積極的に交流を推進する。連携した学術交流に発展させましょう」と呼びかけた。

さくらサイエンスプラン推進室長でもある沖村氏が、この事業の目的を説明し「若い世代の交流が未来志向にとって重要である。さくらサイエンスプランにも是非参加していただき、お互いに研鑽するプログラムにしたい」と語りかけ、大きな拍手を浴びた。

日中の関係者による記念撮影

偉大な思想家を祀る孔子廟などを見学

これに先立ち、曲阜市で生まれた孔子を称える孔子廟と史跡を見学することになり、日本代表の一行は、スケジュールを調整して孔子廟と孔子墓石を見学・参拝した。中国でも孔子は特別の存在であり、廟と墓地には多くの中国人観光客が訪れていた。

偉大な思想家・孔子の墓所を参詣

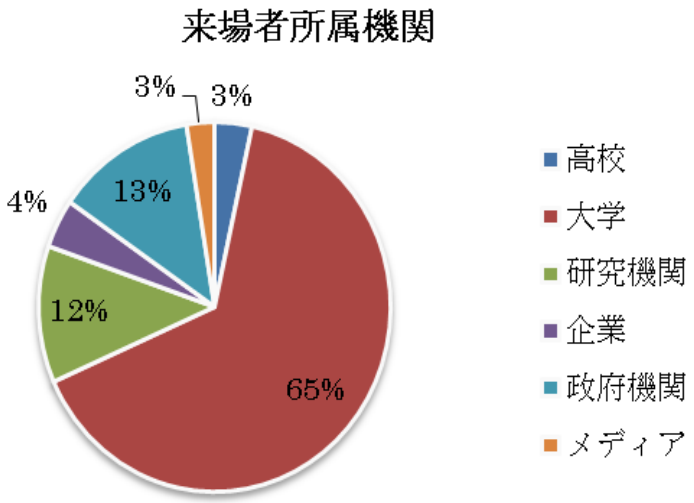
今から約２５００年前の孔子の言葉は、論語として残っているが、当時は印刷技術がないため弟子たちが樹木や竹の板に文字を書き、それを革ひもでつないで残したという。こうした史実をたどりながら日本からの代表団は大きな感銘を受けていた。

。

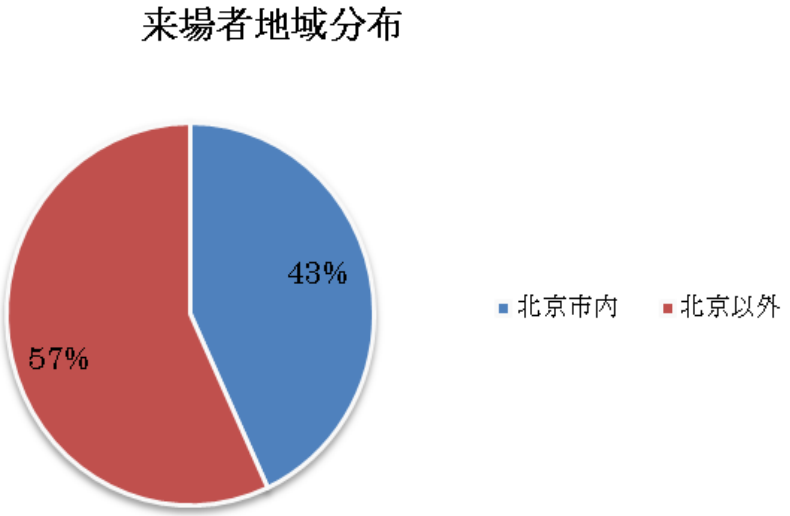
7. アンケート集計

１）　フォーラム参加者

①　来場者所属機関

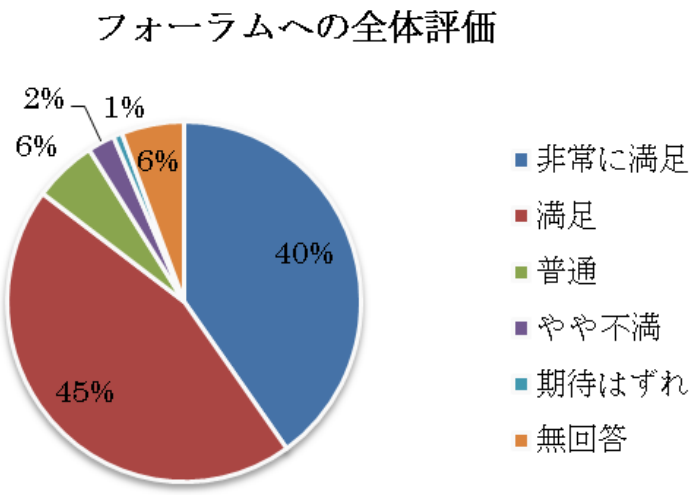


②　来場者地域分類

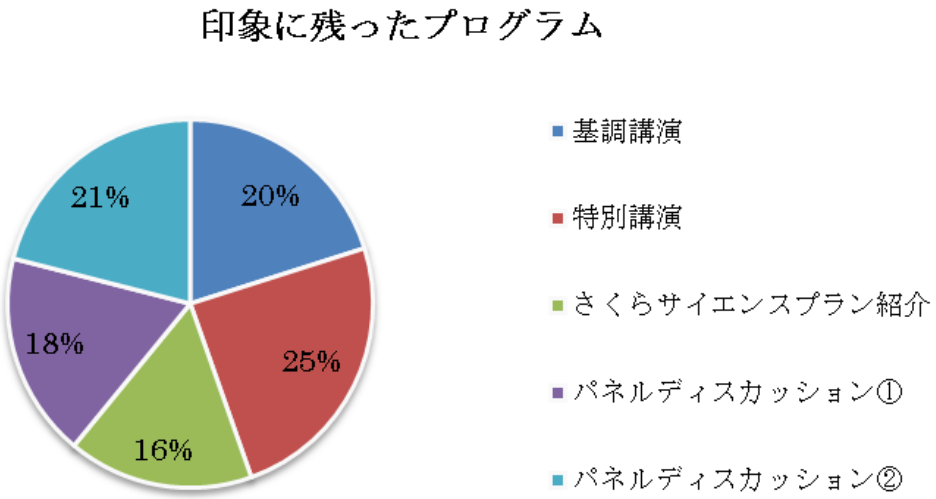


注：　北京以外の来場者の地域：　雲南省、四川省、上海市、シンセン市、武漢市、西安市、アモイ市、青海省、長春市、広州市、瀋陽市、太原市、蘇州市、青島市、甘粛省、ハルビン市、内モンゴル

③　フォーラムへの全体評価



④　印象に残ったプログラム

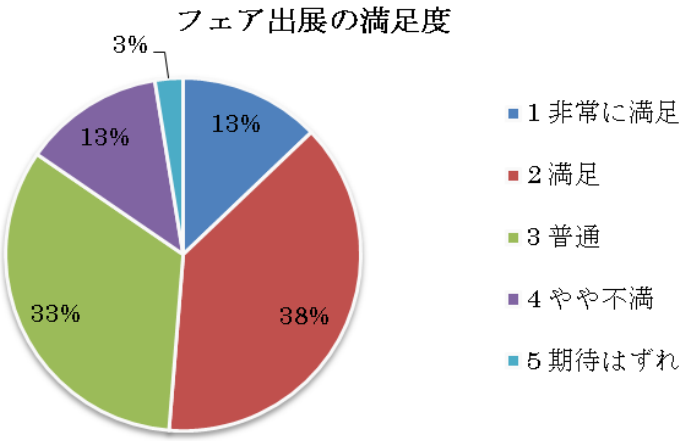


⑤　フォーラム来場者からの主なコメント

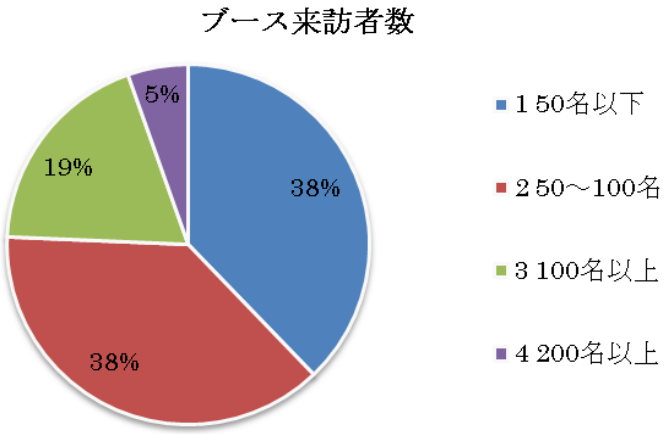
- とても素晴らしいテーマだった。グローバル化のもと、将来を背負う若手人材、特に日中の国際視野を持つ人材の育成について、次回のテーマにしてほしい。
- 日中大学間交流に、非常に役立った。
- 日中超一流大学の学長クラスは様々な角度から世界最高レベルの大学構築について、深くご討議いただき、日中両国の人材育成の立場にいる人にとって、大変参考になった。このようなフォーラムは是非続けてほしい。
- 大学のマネジメント、管理体制等について、これからのテーマにしてほしい。

２）　日本側大学フェア出展者

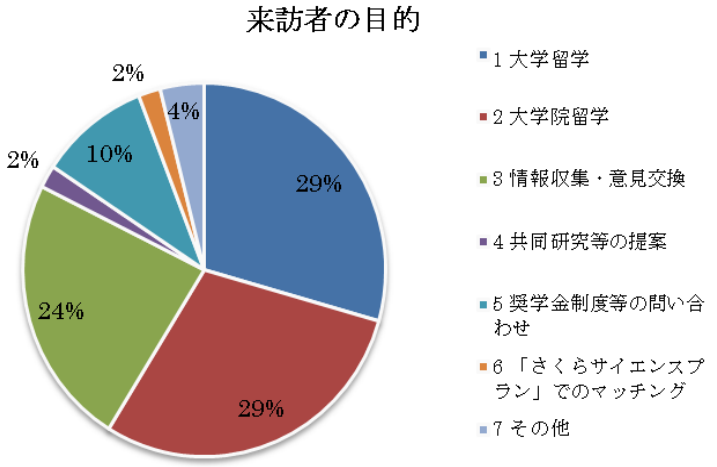
①　フェア出展の満足度



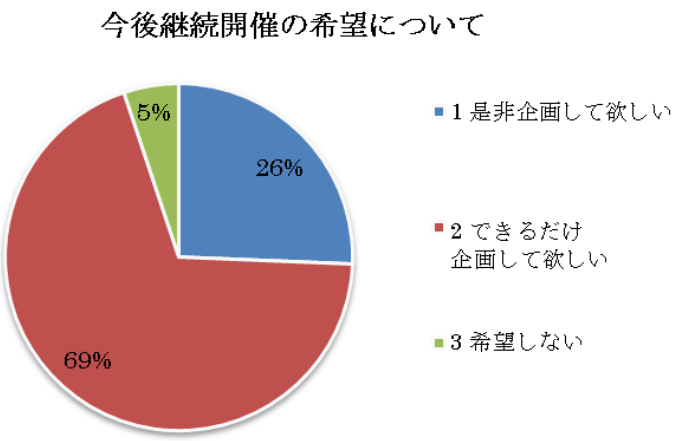
②　ブース来訪者数



③　来訪者の目的



④　今後継続開催の希望について

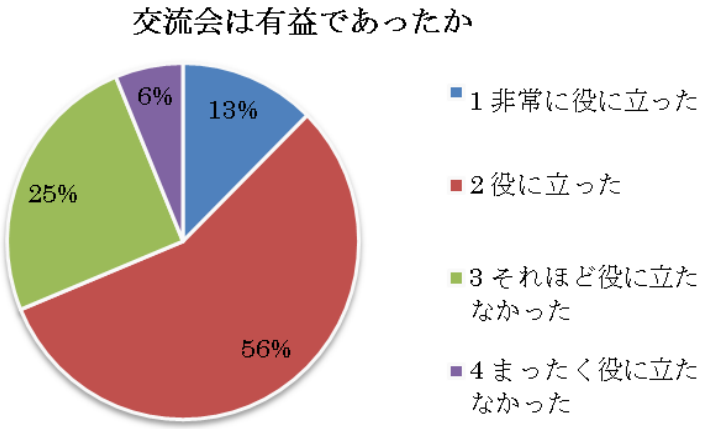


⑤　日本側フェア出展者からの主なコメント

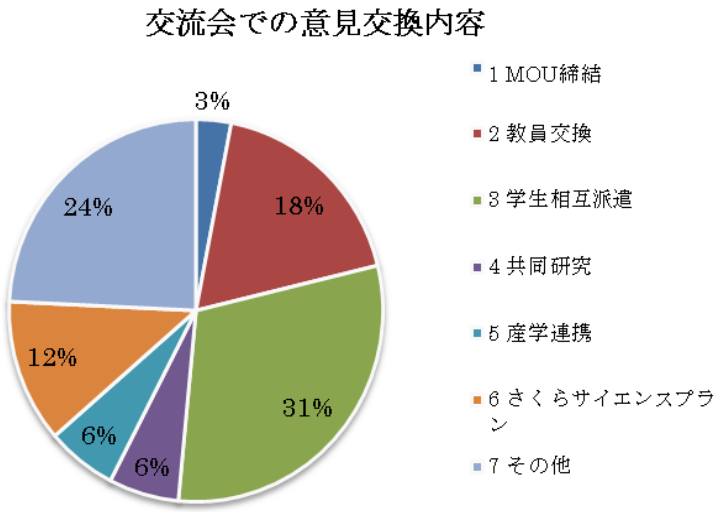
- 北京の留学希望者のニーズを直接聞くことが出来る大変有意義な機会となりました。
- 5 月上旬にこのフェアの開催の時期としては非常に適切だと思います。来年度も是非よろしくお願いします。
- 全体の大学出展リスト（各国の）があればよい。各国の大学（日中に限定せず）からの参加者が情報交換できる場が欲しい。
- ブースに訪れた方を見ると学生本人はとても少なく、親や親戚、仲介業者の方々がほとんどだった。もっと学生さんが参加してくれると嬉しい。
- 日本の大学に比べ、欧米の大学のほうが人気があることがよくわかり、危機感を感じることが出来た。
- ２ヵ所での実施であれば、やはり北京・上海が望ましいです。
- ブースに訪れた方を見ると学生本人はとても少なく、親や親戚、仲介業者の方々がほとんどだった。

３）　日中交流会（北京会場）について

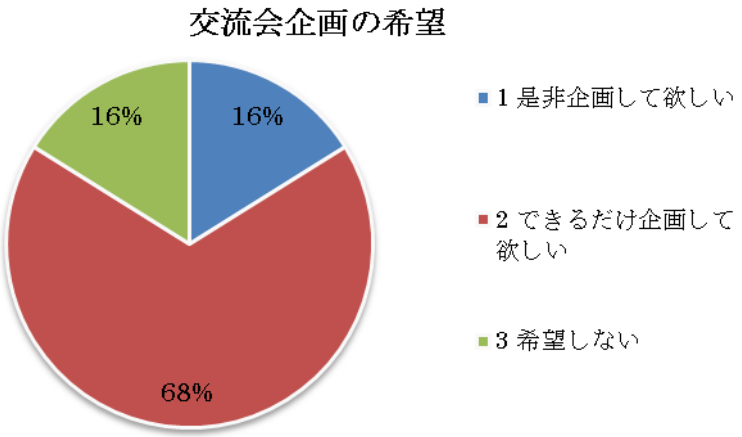
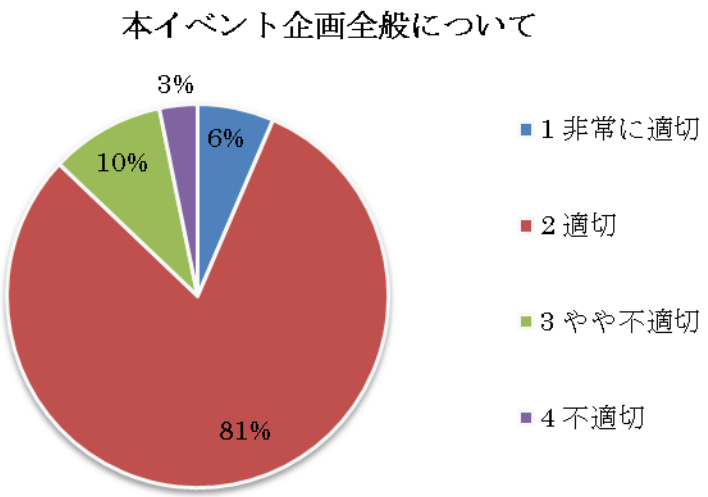
①　交流会は有益であったか



② 交流会での意見交換内容



③ 今後継続開催の希望について



３） 今回のイベント企画全般について